八ヶ岳には、「富士山と背比べをして勝利、しかし富士山に蹴り飛ばされて八つの峰になった」という神話があり、また、「多くの山々が重なり合っている山域を言う」とか。夏沢峠を境に険しい岩稜の山々が連なる南八ヶ岳となだらかな山と樹林帯が山稜まで続く北八ヶ岳に分かれる。

南八ヶ岳は、編笠山・権現岳・阿弥陀岳・赤岳・横岳・硫黄岳の一連の岩稜の山々を言うが、その 主峰である赤岳は、天地開闢の際に現れた国之常立神(くにのとこたちのかみ)の山であり、現在 石祠のあるところは戦前に国常立命像があった。神話や信仰を持つ古くからの歴史の山である。

一方、北八ヶ岳には、諏訪富士と呼ばれる蓼科山を始め北横岳・縞枯山・茶臼山等のなだらかな山々もあるが、中腹や裾野に点在する湖・池・沼、シラビソ・カラマツの森と湿潤な気候を好む苔に覆われた原生の林がその魅力でもある。

この地域は火山性の山であり、稜線の西東には、日本最高所の本沢温泉を始め多くの温泉にも恵まれている。この様に、岩稜の山々、高山性の樹林と苔むす森林、湖池に恵まれ、山歩き、温泉、湖畔でのレジャーが楽しめる地域とも言えよう。

さて、今回の縦走山旅は、本来、小淵沢側の編笠山から赤岳を経由し蓼科山までの縦走を試みるべきであったが、交通の便・日程から、美濃戸口から入り赤岳を起点としたもの。南八ヶ岳の中核部である権現岳・阿弥陀岳・赤岳の尾根ルートは機会があれば訪れよう。また、10月連休を外し夜行バスで9日に現地入りしたので山小屋はどこも空いており、山歩きも混雑することもなく、快適な旅であった。

目的は、「山頂・稜線から山の目覚めを感じること」「ゆったりと森や林を味わう事」であった。 南八ヶ岳「赤岳の夜明け」、北八ヶ岳「苔むす森、秋風の吹く林を抜けての池巡り、霧の蓼科山」は 目的にかなったものとなり、快晴での眺望、霧に巻かれた山頂、小雨の林、秋の青空に赤や黄色に 色づいた山腹・湖畔など色々な姿を見せてくれた大自然に感謝するものとなった。

南八ヶ岳

10日、赤岳 2899mの目覚め。東の空が赤みを帯びる頃、山裾には青白くうねる波の様に流れる 雲海、そして、蒼く明け行く天空に浮かびあがる峰々のシルエット。雲の海の向こうには高層を流 れる雲と鎮座する富士の姿。峰々を渡る風の調べに、刻々と変化する光の世界が強さを増してくる。 もうすぐ夜明けだ。やがて、岩肌が真っ赤に染まり、赤岳が目覚めた。白く漂う雲とも靄とも知れ ぬ地平の向こうには、既に目覚めた富士。天地開闢。古事記や日本書紀にある「天地創造」を彷彿 とさせられる情景が目の前にあった。ほんの一瞬に繰り広げられた大自然の目覚め。静寂の中に慄 きと驚愕と畏敬が入り混じり、その営みに身が溶け込むような感覚に時を忘れ見入った。これが古 代信仰の山たる所以であろう。古代人はそこに何をみたのであろうか?

陽は周囲の山々へ光を届け、やがて、たなびく雲海は薄らぎ、山裾の里にも柔らかな秋の朝をもたらした。岩稜の続く南八ヶ岳だからこそ、この日の出は厳かなのであろうと考えながら、吹き付ける霧の中、荒々しい岩稜の横岳へと歩を進めた。

横岳は、二十三山峰、日の峰、鉾岳、石尊岳、三叉峰、無名峰、奥ノ院の峰々から成り立つが、

実際に歩いてみると、横岳奥ノ院の山頂標 2829mしか分からなかった。また、霧が無ければ昨日登山道からみた「大同心」「小同心」と言われる巨大な岩柱が見えるはずだった。同心とは江戸時代の警備の役職名で、横岳を二人の同心が警備していると言われているが、同心は童心とも書かれ、近くにある地蔵尾根・地蔵の頭の地名から童心地蔵とも。横岳を過ぎると険しい岩稜から解放され、なだらかな山へと変わる。しかし、硫黄岳に差し掛かると、吹き上げる強い西風と霧に悩まされる。大ダルミと呼ばれる広い尾根は濃霧に見舞われると道迷いを起こしやすく幾つものケルンが山頂まで導いてくれる。硫黄岳山頂はなだらかであるが、東に巨大な爆裂火口跡が断崖絶壁となっているので注意。硫黄岳からは、二つの頂から成る天狗岳、切れ落ちた絶壁に沿った中山峠やニュウ方面の眺望が素晴らしい。

この頃には霧も晴れて、東には小海線沿の清里・野辺山と埼玉の山々、西には諏訪湖、槍・穂高連峰や立山・剣、北西の浅間山、南に見え隠れする北岳など有数の山々の眺望が素晴らしい。遠近の山の眺望を存分に楽しむには南八ヶ岳が良い。

北八ヶ岳

硫黄岳を下ると夏沢峠、いよいよ北八ヶ岳である。峠を後に登り始めるとシラビソの林。眺望も閉ざされ足取りも重くなった。時間があれば峠から日本一高所にある本沢温泉に寄ってみたいと弱音も出始める。箕冠山を越え、根石岳からは眺望も開け、西・東天狗岳は山頂に至るスロープと相似の姿が美しい。東天狗岳と根石岳との鞍部はハイマツの緑の絨毯が敷き詰められ、オアシスのようだ。夏場には根石岳山荘に泊まって、山々の眺望や高山植物や温泉等も良いだろう。天狗岳では、今日歩いてきた赤岳からの山々を振り返り、最終地点である蓼科山も眼前にし、気持ちの良いお昼となった。だが、道間違いは下山時に起こった。中山峠方面ではなく、「天狗の裏庭」から黒百合ヒュッテ方面へ降りてしまった。そこは苦手な大きな岩石のガラ場。時間と体力を消耗し、気力も萎え、白駒池までの予定を変更し、黒百合ヒュッテ泊とした。14時からガラ道を更に3~4時間は無理であっただろう。

翌日11日はコースを変更。時間超過と疲労から北横岳を諦め、雨池経由双子池の高度差の少ない林間コースを辿ることにした。

案の定、白駒池までは苔に覆われた大石とぬかるみの下り道で歩きにくい。ニュウにて富士山を眺め、いよいよ、北八ヶ岳の広大な山麓にある苔むした原生の森に達する。にゅうの森:ミヤマクサゴケ、白駒の森:カギカモジゴケ、黒曜の森:フウリンゴケ、もののけの森:ムツデチョウチンゴケ、茶水の森:ホソバミズゴケなどの森群と多くの苔の種類。苔は倒木や林に転がる石をこんもりと包みこみ、原生のジャングルのようだ。苔が敷き詰められた緑の林は気持ちを穏やかにしてくれる。そして雨や霧に包まれた森は、それを一層美しく演出してくれる。

麦草峠から雨池・双子池コースは、北八ヶ岳自然休養林の中、池巡りを楽しむ山道である。池は、 渇水期のため、ごろごろとした石が湖底から浮き上がり、赤や黄色に色づいた周囲の木々が深まる 秋を醸し出していた。雨池では、青空に流れる雲の行方を追いながら静かな湖畔に寝そべり、勝手 気ままな独り旅のひと時を楽しんだ。池と池とを結ぶ登山道は人通りもなくひっそりとして、林を 吹き抜ける風の音と枯葉の落ちる音だけ。笹の小道や苔の森を通り抜け落ち葉の積もった細くふか ふかの道は趣き深い。 次の日12日、双子池から双子山に登る頃には小雨となった。双子山山頂は霧に覆われ何も見えない。蓼科山と大河原峠に囲まれた広々とした笹原を見たかったのだが仕方ない。雨とも霧とも区別のつかない中、蓼科スカイライン沿いにある大河原峠に着いたが、大河原ヒュッテは休業、駐車場にも車もなく、閑散としたものだった。

縦走最終地の蓼科山へ

蓼科山 2531mは八ヶ岳の北のはずれ、縦走の最終地点でもある。雨も小康状態、大河原峠から将軍平へ向かうが、石がごろごろしている急で濡れた坂道は、疲れた体には堪えた。やがて、勾配も緩やかになり、笹に覆われた林もこの辺りになると苔が優勢となる。シラソビの苔の林を快適に歩き、やがて蓼科山荘のある将軍平に達する。ここからが蓼科山への正念場、大きな石の急こう配のガレ場。思い返すと、八ヶ岳の登山道には、このような岩石のガレ場が随分あった。噴火時の岩塊が侵食により大きな石だけが取り残されたのだろうと、悠久の時が偲ばれる。

蓼科山頂は深い霧に包まれていた。近くに蓼科神社の奥社の祠があると言うが、無造作に散在するごつごつした岩塊が続くだけ。どうやらルートを外したらしい。冷たい霧雨と風の中、稜線らしき岩々を辿ると、薄っすらと塔のようなものが見えた。方位盤である。遠くの山々を示す方位盤は無く台座があるだけで方位は分からない。コンパスは山小屋に荷物を預けたので方向が分からない。周りを見渡すと前方にケルン。これらの岩群は円弧を描き山頂を周っているのでは?方位盤にて風を避け、休むことにした。無機質な岩と向き合っていると、次第に意識が自分の中に入ってゆく、そこには、風が体をすり抜けるような透明な世界があった。静寂と色の無い世界。ふと我に返りケルンの方に行こうとすると、黄色い矢印が見つかった。辿ると祠へ出た。わずか100mぐらいの距離であったが、縦走最終の山頂は、赤岳の「色の世界」とは対照的に「無の世界」であった。

私のために建てられたかの様にヒュッテを独り占め。先代のオーナーが音楽好きとか、マニアックな音響設備とピアノ。本当にここは山の上か?据え付けのノートを読むと、混みあうことがなく、家族連れでも楽しめるようだ。寒々とした無の世界を感じた後だけに、心地よい音楽と暖かな部屋は楽園とも思えた。

翌朝13日。雨。何も見えない山頂に別れを告げ、七合目登山口へ向け下山。滑りそうな大岩、小川の様になった登山道。快晴の赤岳への登りとは対照的でこれも面白い。ゴンドラから観る景色は、カラマツやシラカバの黄色い葉が、秋雨の中に雪の季節を迎える前の鮮やかな彩を放っていた。秋雨の中、蓼科牧場、女神湖、白樺湖は、紅葉真っ盛りであった。

八ヶ岳の独り旅

双子池ヒュッテで、関東の山岳連盟の重鎮らしき老人に出会った。八ヶ岳というところは、「誰でもがそれぞれに山を楽しめる所だ」と。まさにその通りである。鋭い山、柔らかな山、苔や笹に覆われた森林、湖池、それらは天候によって色んな姿を見せてくれた。また、山小屋が空いていたこともあり、色んな方たちとの語らいの時を持てた。自然と人とのふれあいを感じる山旅であった。このような機会が持てたことに感謝する。

【赤岳の夜明け】真っ赤に染まる赤岳と雲海に浮かぶ富士山













【横岳を超えて】







赤岳の夜明けを撮ったのは横岳の斜面









大同心・小同心の岩柱

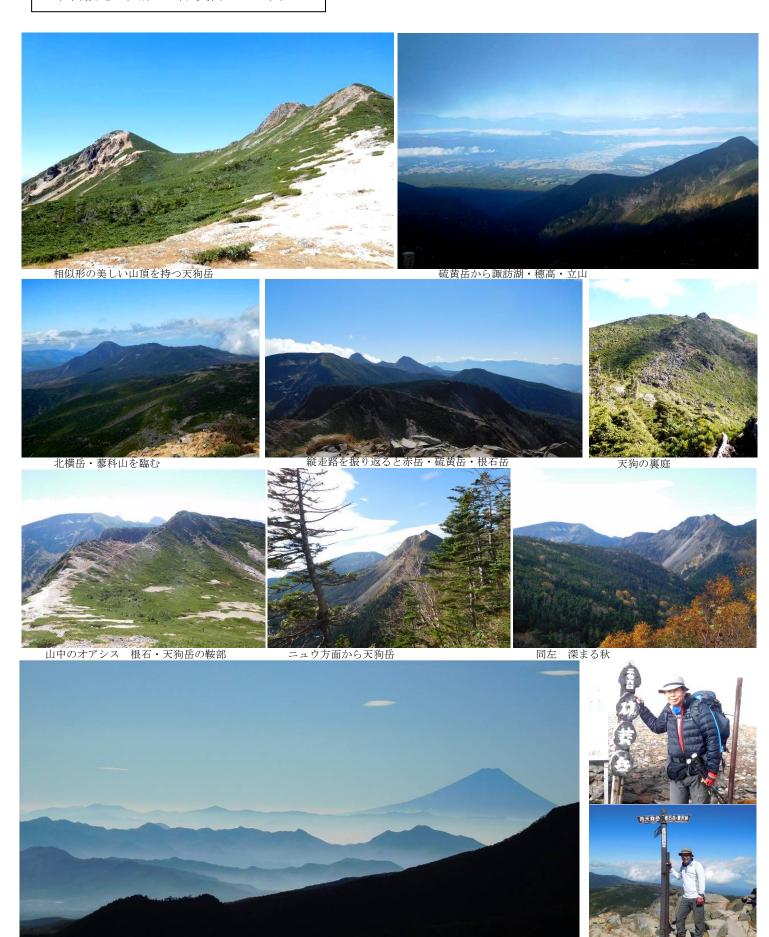
横岳の蟹の横這い

地蔵の頭の地蔵様

横岳頂上 奥の院

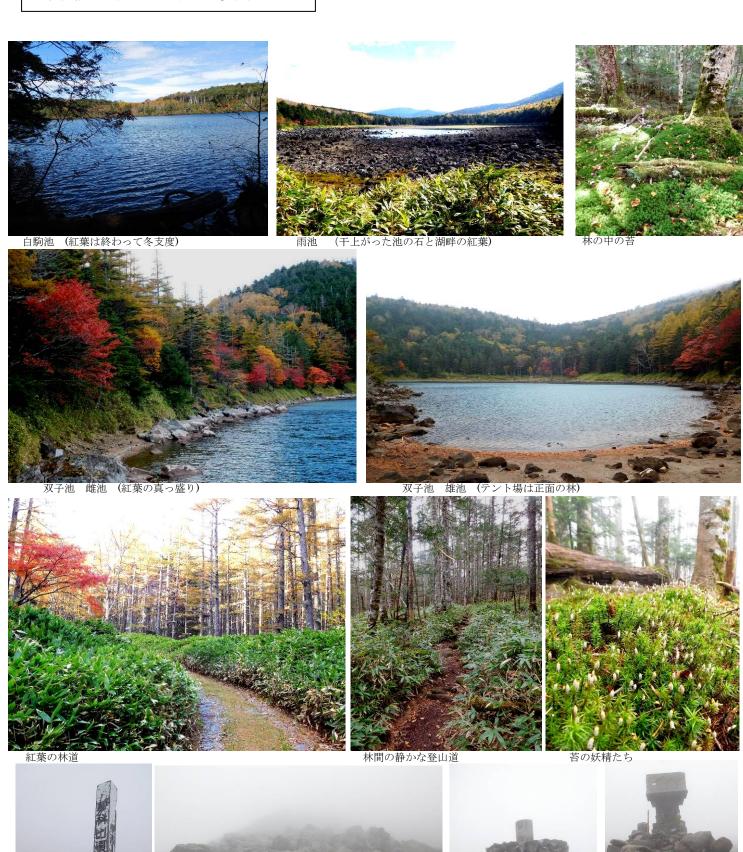
赤岳山頂にて

八ヶ岳縦走の山旅 (硫黄岳~ニュウ)



富士山と峰々のシルエット (ニュウから)

八ヶ岳縦走の山旅 (白駒池~蓼科山)



蓼科山 山頂

濃霧の岩塊 (コースを外し無の世界へ)

やっと見つけた方位盤

蓼科神社の奥社の祠